

# 支払代行とネットイング

柳洋二郎

サンガードアジアパシフィック  
ダイレクター・トレジャリー・ソリューション

トレジャリー・マネージメント・システム(TMS)は本質的には、企業を持つ資金の管理(流動性リスクの管理)およびそれに伴う市場、信用リスクの管理を行うシステムである。

一方、支払代行とネットイングは、AP/ARを主とする取引の効率化を目指すものであり、決済の仕組みを集中化し、その上で効率化を目指す一つの枠組みになる。以上を前提とし、本稿では決済の集中化を目的とする支払代行とネットイングをTMSでどこまで実現できているのかを述べる。

## 支払代行とネットイングの位置付け

一般的に支払代行は外部への決済を対象とし、ネットイングはグループ内の決済を対象とすると説明されているが、プロセスの観点から見ると、ネットイングは支払代行を実現させた上で相殺を行うため、ネットイングは決済代行を含むと考えることができる。実際に外部への支払いをネットイングする仕掛けは存在し、典型的な例としてCLS(Continuous Linked Settlement: 銀行による外国為替の同時決済の仕組み)が挙げられる。支払代行とネットイングの全体像のイメージを次ページの図で表現した。この中で二点ほどポイントを挙げると、まずネットイン

グの結果は必ずしも資金移動を伴わず、関連会社と本社間の貸借勘定で処理することができることである。これにより、不要な資金移動を最低限に抑えることが可能である。二点目として、入金集中を行うことで、外貨のマリーが実現できることである。いずれにせよ、決済集中という仕組みの中で、支払代行やネットイング、その他の仕掛けが実現されることになる。

## TMSによる支払代行の実現

支払代行のフローは総じて単純である。まず参加各社から支払データを集める必要がある。これは、インターフェース(一般的にはAPシステムとの連携やExcelのアップロード)で行う場合と手入力のケースに分かれる。手入力の場合は、参加各社で最低一回は承認が必要になり、本社(代行センター)側では承認を行うケースと行わないケースに分かれる。その後は、実際に送金を行うために必要な情報を銀行に送るが、効率的に処理するために、通常月一〜二回の決められた期日のみの送金とし、この段階で同一支払先の取引を取り纏めることもある。送金手段としては図にあるように、大きく三つのパターンに分けることが可能

である。また、出金確認(リコンサイル)を本社(代行センター)で行い、参加各社に結果を伝えるのが普通である。以上のフローを前提として、TMSの特徴的な機能として大きく三点挙げられる。第一に支払データの収集の観点では、手入力はもちろん、インターフェースも可能である。手入力の場合、承認プロセスを複数持つことが可能であり、また、取引の条件(金額や通貨、最終受取人等)により承認の要否を設定することも可能である。二点目としては所謂Ad-hocの支払をシステムとして許容するか否かの制御機能を持つ。この機能により、最終受取人の入力ミスや不正送金を防ぐことが可能である。最後に送金であるが、TMSでは通常SWIFTや主なローカル決済ネットワークとのI/Fを標準で装備するため、開発の負担が少なくてすむ。また、銀行のCMSシステムとのI/Fも雛形を装備しているケースが多い。

支払代行を行うことのメリットは、一般的には集中化による決済手数料の削減と指摘されるが、これはたいした金額にはならない(ネットイングと異なり、決済取引の件数は減らないため)。むしろ、事務の集中化による人員の削減、コンプライアンスの強

化、事務リスクの低減、重複するシステム投資（もしくは保守費用）のコスト削減効果が大きいと思われる。特に外貨送金の場合、外貨の調達を本社に集中することで、事務の煩雑さからの開放や、調達に伴う手数料の削減効果が顕著に見られる。

### TMSによるネットティングの実現

ネットティングのフローは、支払代行に比べる とはるかに複雑であり、またパターンも幾つかある。まず、参加者間の支払を相殺するため、ネットティング期間を設け、その期間中に入力された取引を相殺対象とする。相殺の方法も二者間（バイラテラル）の相殺と多者間（マルチラテラル）の二通りがある。また、一般的には参加各社間で支払（受取）情報に合意し、本社（ネットティング・センター）は支払（受取）情報の正確性には関与しない。以上を考慮して、ネットティングでは、① ネットティング期間の設定、② 対象取引の入力、③ 入力された取引の確認、④ 仮締め（相殺結果を参加者に知らせる）、⑤ 資金調達、⑥ 締めおよび決済、の流れが典型的なフローであり、この流れはTMSでもサポートされる。ここではそれぞれのプロセスでTMSが持つ特徴的な機能をいくつか紹介する。まず、対象取引の入力は通常支払取引を入力する。しかし、入金取引（請求書ベースの入力や、両方を入力し、システムで突合、

齟齬のある取引のみを各社に連絡することも可能である。また、入力された取引に問題がある場合は、参加各社がTMSを用いて会話し問題の解決を図ることが可能である（お互いのやり取りは全て記録に残る）。資金調達に関しては、不足する通貨の資金を自動的に貸し付ける機能も保持する。さらに、各通貨での相殺結果を最終的に参加各社の自国通貨に換算し、決済尻を計算することも可能である。もちろん単純にネットティングを行いたいという要望に対しては、フローの省略や簡素化も可能である。

ネットティングを行うことの最大のメリットは決済手数料の削減である。相殺を行うことで、基本的に決済件数は参加者の数に収斂される。そのため、グループ間の決済が多い企業ほど効果が出る。一方、これほど顕著な効果が出る仕組みのため、多くの企業では手作業、Excelベースで既に実現しているのが現状である。そのため、システムを導入することの効果は、多くの取引をExcelに集める労力や、期日の管理、参加各社との電話での連絡に伴う労力の削減やコンプライアンスの強化、事務ミスの削減等になる。現実には、手作業による作業負荷の制限から、ネットティングの仕掛けに全社が参画できない例も散見される。

●支払代行とネットティング全体像

